

## 新刊のご案内

**本**書『視覚の共振』の著者・勝井三雄氏は、戦後のデザイン史のなかで大きな業績を残し、今なお現役として、新たな視覚世界への挑戦を続けるデザイナーです。

主な専門領域はポスターなど二次元のグラフィックですが、エディトリアル、CI、サイン、ディスプレイ、空間構成ほか、幅広くアートディレ

クションに携わり、多様な表現を追求してきました。企業の広報を担うデザイナーを皮切りに、フリーランスとして制作に取り組むようになってからは、時代を牽引するデザインの動向と密接に関わり、多様な領域のクリエイターと協働しました。

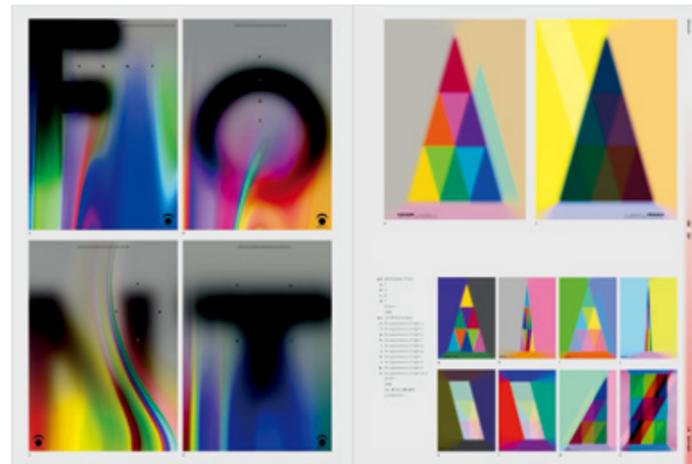
早くからコンピュータ・グラフィックスと先進的な印刷技術の開拓に

関心をもち、そのかわら、「色と視覚」に関するデザイン理論を実践的に構築しつつ、美術大学で次世代の指導にも力を尽くしました。

本書は勝井三雄氏の60年余の活動を、「時代」「デザイン」「人物」などの観点からも把握できる構成をとっており、見ているだけで美しさを感じ取れる作品集となっています。



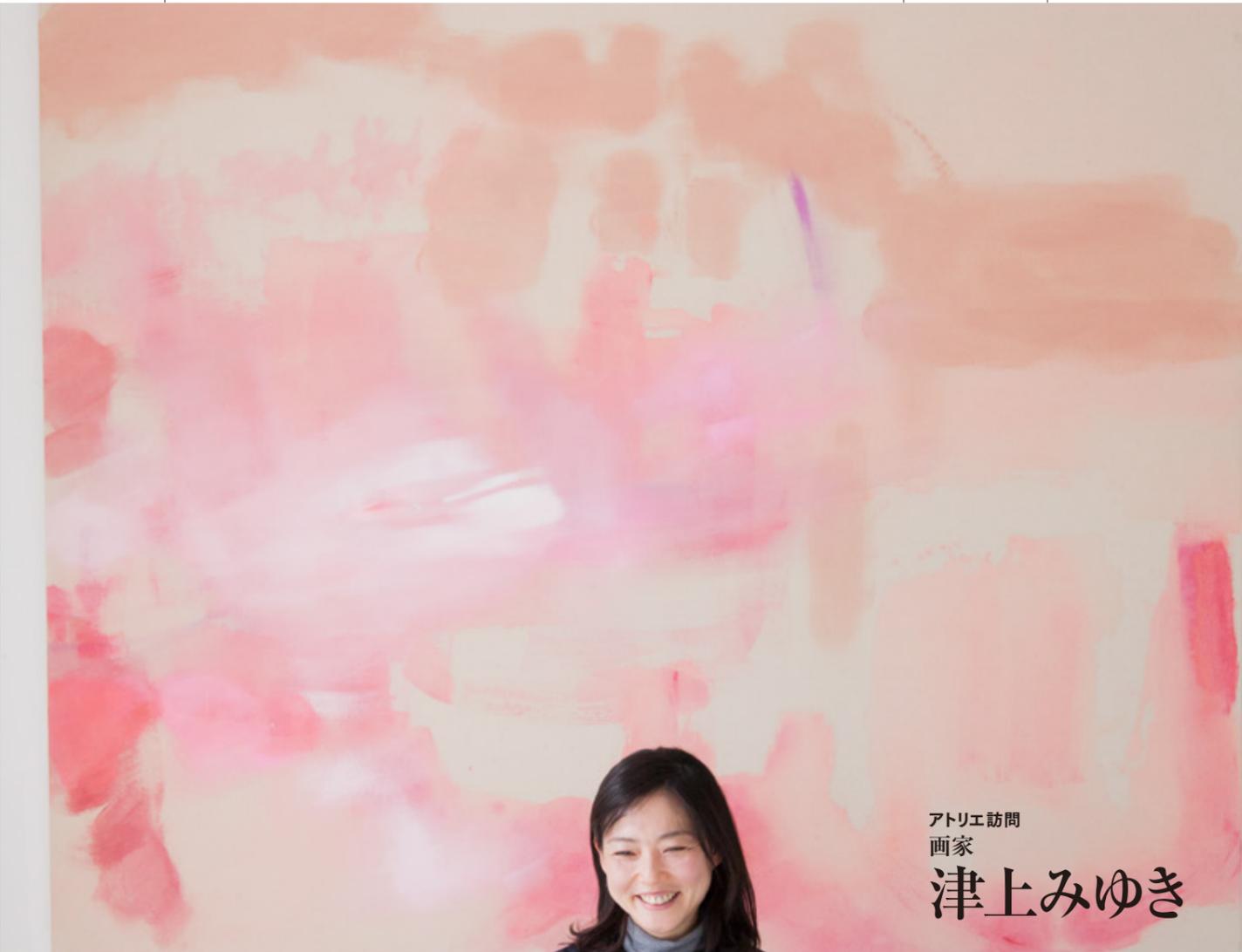
『視覚の共振』  
勝井三雄著 光村図書出版 2019年  
本体3,000円+税



上／版画作品と、それを用いたポスター  
下／フォント制作会社のポスター

美術準備室 No.15  
2019(令和元)年6月28日

発行人 ■ 小泉 茂  
発行所 ■ 光村図書出版株式会社  
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9  
電話：03-3493-2111 www.mitsumura-tosho.co.jp  
E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp  
デザイン ■ Better Days (大久保裕文+深山貴世)  
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社



アトリエ訪問  
画家  
津上みゆき



特集  
「私の心の風景」を  
描こう  
東京都  
府中市立府中第六中学校

作家の肖像  
洋画家  
野見山暁治

放課後ART  
●長野県  
軽井沢高等学校  
●アークスプロジェクト

この1点  
「弥勒菩薩  
半跏思惟像」  
はな

本誌は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、(一社)教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」のとおって配布しております。



アトリエ  
訪問

第 15 回

津上みゆき

画家

キャンヴァスからあふれる光と色彩。

画家・津上みゆきが描く抽象画のようにも見える風景画は、

目にした者の記憶の中にある風景をよびさます。

彼女はどんな光の中で、何を見つめながら、

その作品を生み出しているのだろうか。

文章 長谷川 華 撮影 永野 雅子

# 「人が描かれていなくても、 人のおいが感じられる。 それが風景画。」

大通りを少し入った鎌倉の住宅街。歌人の住まいだったという古い平屋を自分たちでリフォームしたのが、画家・津上みゆきの住居兼アトリエだ。この場所を選んだ理由を、「窓からたっぷり自然光が入り、海にも山にも近くて季節の流れを日々感じられるから」と語る。

——1日の大体のスケジュールを教えてください。

**津上** 夫が勤め人なので、彼が出かけるとともに、私もアトリエに移動します。日が出てるときにだけ制作をし、日が暮れて風景が見えなくなったらやめます。描いているモチーフと、自分の置かれている環境を同じにしておきたいからです。

そのためにも、自然光がよく入るアトリエを探していて。ここは、何



アトリエの一角には顔料の瓶が並び、棚は、瓶の高さに合わせた手づくり。

年も使っていなかった建物を一つ一つ修理したものです。プロの手も借りましたが、壁や床は自分たちで塗りました。棚は夫の手づくりです。

アトリエにいるとき以外は、散歩がてら、スケッチをしに行くこともあります。すぐ近くには小川が流れていて、春になると桜が咲くんです。その桜をここに引っ越してきた9年前からずっと描いていて、その作品を2018年に発表しました。

——津上さんが画家になったきっかけとは、何だったのでしょうか。

**津上** 小さいときは暗い性格で、友達もあまりいなくて、一人で遊んでいるような子でした。母親と仲がよくて、よく一緒に花を見に出かけていました。

中学校は、中高一貫の女子校に進み、そこで美術部に入りました。高校生と一緒に講評会をするのがとてもおもしろかったんです。画家を目指す大きなきっかけとなったのは、3年生のときの夏合宿です。漁村で廃屋みたいな船屋を見つけたのですが、夏の海と空にその船屋というコントラストが印象的で、絵に描いたんです。すると、それが講評会ですごく褒められて、小学生のときの暗黒の時代から一気に自分の世界が広がったのを今でも強く覚えています。

自分が内面から出したものと、外からの評価が合わさったというか、中学生なりに、「絵がないと自分は生きていけないんだ」ということを自覚しました。その後は、日常生活

でもいろいろ苦手なものを克服して、今がいちばん元気です。

——それからずっと風景を描き続けているのですか。

**津上** そんなことはなく、京都の美大ではいろいろなことを学びました。卒業後の研修生時代に、「哲学の道」を自転車で走っていたら、突然、自分が絵を好きになった原点が「風景」だったことを思い出したんです。「今、自分が風景を描いたらどんなものになるんだろう」と思って、再び風景画を描くようになりました。

昔は、スケッチしたものをただ扱



大するという描き方をしていましたが、このとき以来、どういうふうに風景を取り込んでキャンヴァスに落とすのか、それを模索するようになり、今に至ります。

——津上さんにとって、風景画とは



ドイツ滞在時、和紙に描いたスケッチ。「ドイツの風景は、水彩と和紙の質感に合う。」

何でしょうか。

**津上** 風景画って、人がその景色を「風景」とよばなければ風景画にはならない。だから、人があまり描かれていなかったとしても、人のおいを感じられるのが、風景画なのではと考えています。

ただ、説明的に描くと自分のフィルターが見えてしまうようで嫌なんです。誰もがもつ共通のイメージみたいなもの、具体的に写真には撮れないけれど記憶に残っているようなものを、自分なりの表現方法で描けるといいなと思っています。



散歩のときには、スケッチができるように、水彩絵の具入りのパレットを持ち歩く。

つがみ・みゆき

1973年東京都生まれ。1998年、京都造形芸術大学大学院修了。2003年、VOCA賞受賞。2015年文化庁助成により、ドイツにて滞在制作・個展を開催。「View」と名付けた風景画を描き続ける。作品集に『津上みゆき 時の景——つなくとき つもるとき』（求龍堂）。2019年7月13日～9月8日の会期で、神奈川県立近代美術館 葉山にてグループ展「みえるものむこう」開催予定。



特集

# 私の心の風景を描こう

何気ない風景も、見る人によって特別な「情景」に変わる。教科書の「情景、気持ちを重ねて」(『美術2・3』P.16~17)は、自分の思いや感情を風景に重ねて描く、という題材だ。この題材を使った授業を取材した。

撮影 鈴木俊介



## 授業レポート

東京都府中市立府中第六中学校

はたけ やま まり 畠山真理先生 × 2年生

(1組・4組 各37名)

「その風景にどのような思いを重ねたいか。それがいちばん大事ですよ」と畠山先生。

風景を見たまに描くのではなく、その場所から感じたことや、自分の思い出などを重ねて、「私の心の風景」として描く—今回、畠山真理先生が、2年生で行う授業だ。生徒たちは、小学生の頃に風景を描く体験をしてきているものの、今回のような「風景画」に取り組むのは、もちろん初めて。さて、どのような作品が生まれるのだろうか。

### ◆第1時 ◆描く風景を決める

「みなさん、風景の写真を持ってきましたか」。先生がそう投げかけると、生徒たちは、自分の手元にある写真をじっと見つめる。

先生は前時で、心に残る風景の写真を持ってくるよう、生徒たちに伝えていた。家族で行った海、部活の試合で行った市民グラウンド、昔住んでいた街など、それぞれに風景の写真を手にしている。「今回の授業では、心に残る風景に、そのときの自分の気持ちを重ねて絵を描きたいと思います。まずは、グループになって、写真を見せながら、その風景に



グループで、自分の「心に残った写真」を見せ合い、どんな思いを重ねて描いてみたいか交流する。「なぜその風景を選んだの?」「どんな気持ちだった?」など、友達に質問されるなかで、自分が描きたいものが、しだいはっきりしていく。

どんな思い出があるかと、どんな気持ちを重ねて描いてみたいかを話し合ってみましょう。

生徒たちは風景への思いや、どう描いてみたいかを、グループで発表していく。

ると、四季を感じます。四季が一周すると自分も一つ歳を重ねるので、この風景に成長していく自分を重ねて描いてみたいです。」

何気ない日常の風景だが、生徒たちの思いを聞くと、急にかけがえないものに思えてくる。

いっぽうで、ただ「きれいに撮れたから」という理由で写真を選んで持ってきている生徒もいる。「この授業では、きれいに撮れているかということは、あまり重要じゃないんですよ。自分がその風景にどんな思いを抱いているかということが大事。身の回りにきつとそういう風景があるはずだから探してきてね」。先生は生徒たちに、一人一人ていねいに声をかけていく。

そして、次時では、アイデアスケッチを進めることを告げて、この日の授業は終わった。

### ●近所を流れる多摩川の写真を持ってきた生徒

「1年前に転校してきたんですけど、引っ越したばかりのときに、両親と多摩川の近くを散歩しました。夕暮れどきで、川面に映る夕日がキラキラ光っていて、とてもきれいでした。その風景を見て、「新しい学校でもがんばろう」と思えたんです。そのときの気持ちを込めて描きたいです。」

### ●自宅から見える公園の写真を持ってきた生徒

「自分の部屋から公園の木々を見

◆ 第2時  
◆ アイデアスケッチをして  
◆ 構想を練る

授業の冒頭では、教科書の「情景、気持ちを重ねて」(『美術 2・3年』P.16～17)に掲載されている東山魁夷の「道」や、高山辰雄の「由布の里道」などの、風景を描いた作品を鑑賞し、作家の色づかいや表現方法の工夫を感じ取った。

その後、先生は「自分の思いをあらわすために、どのような形や色、表現方法で描いたらよいでしょうか。グループで発表してみましょう」と投げかけ、青とピンクの付箋を配布した。「友達の発表を聞いて、『いい

な』と思ったことをピンクの付箋に、『もっとこうしては』というアドバイスを青色の付箋に書いてください。そして、その付箋を発表した人に渡してくださいね。

生徒たちは4人グループになり、順に発表していく。Hさん(下写真)は、祖母の家の茶畑の風景に、祖母の優しさや、一緒に茶摘みをした温かい思い出を重ねて描きたいと考えている。「おばあちゃんの優しさを表現するために、色鉛筆を使って茶畑の風景を優しい色合いで描いてみたい」と発表すると、グループの皆が「いいね」と笑顔でうなずく。しばらくで、Hさんのアイデアスケッチ

を見て「温かい思い出を重ねるなら、もっと暖色系を使ってもよいのでは」などのアドバイスも。

友達のアドバイスが書かれた付箋を受け取ったHさんは、自分のワークシートに貼って、しばし何かを考えている様子だった。そして、最初は実際の風景と同じように、緑色で茶畑のアイデアスケッチをしていたHさんだったが、友達の意見を受けて、オレンジ色や黄色などの色を重ね始めた。

他の生徒たちも、グループでの発表の後、友達の付箋も参考にしながらアイデアスケッチを描き進めていた。



上/グループで意見を交わすHさん。  
左/Hさんのワークシート。  
どんな思いを重ねて描きたいか文章でまとめてから、アイデアスケッチをした。  
友達からもらった付箋も、ワークシートに貼る。

◆ 第3～10時  
◆ 描きながら考える

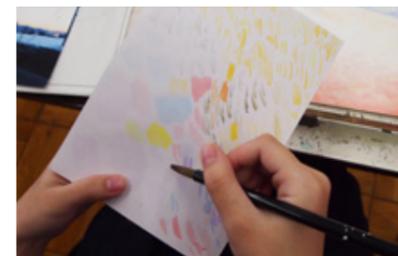
本時より、いよいよ作品の制作に入る。

アイデアスケッチを見ながら、どう描くか迷っている生徒もいれば、ためらいなくスイスイと筆を動かしている生徒もいる。

Mさん(下写真1)は、コートのある風景に、試合で勝ったり負けたりしてさまざまに入り混じった感情を重ねて描きたいと思っていた。どう表現するか考えていたところ、「いろいろな色で筆の跡を残すように描けば、自分の入り混じった感情を表



1/自分のさまざまな感情を点描画であらわしたMさん。



2/家族との思い出をどんな色で表現すればよいか、試し塗りをするKさん。



3/四季をどうあらわすか悩んだH君。背景をグラデーションにすることにした。



現できるのでは」と思い、点描画のようにあらわすことにした。自分の思いを確かめるかのように、少しずつ色を重ねていく。

また、Kさん(下写真2)は、小学生の頃に家族と雪かきをした雪景色を描こうと思っていた。「なつかしい気持ちや、家族と雪かきした温かい気持ちをあらわすには、寒色ではない色を使ったほうがよいのかもしれない。どんな色がよいだろう」と、何度も試し塗りをし、淡いピンクやオレンジ色など、自分の気持ちに合った色を探していた。

第1時で自宅から見える公園の風景を描きたいと話していたH君(下写真3)は、公園の四季の風景と自分



制作中に何度も手を止めて、描き方を考えたり、夢中になって筆を動かしたり、集中して取り組む生徒たち。

の成長を重ねて描こうと、表現方法を模索していた。考えた末に、四季の移り変わりをあらわすため、背景を緑から赤へ徐々に変化するようにし、さらに、成長する自分を力強くあらわすため、筆で叩くように色を塗っていった。

第2時ではどう風景を描くか、友達と楽しく話し合っていた生徒たちだが、いざ制作に入ると、自分と向き合い、試行錯誤を重ねながら、真剣な表情で制作に没頭している。毎回、時間いっぱいまで筆を走らせている姿が印象的だった。

そして、いよいよ最後の授業。できあがった作品を満足そうに眺める生徒たちがいた。実際の風景に、生徒たちの思いが込められた、「私の心の風景」が、そこにあった。



授業展開 生徒の活動(全10時間)

- 第1時:導入  
これまでの思い出を振り返り、どのような風景を描くか考える。
- 第2時:構想を練る  
アイデアスケッチをし、自分の思いを、風景にどう重ねて描くか考える。
- 第3～10時:制作  
どのような形や色、表現方法にしたら、自分の思いをあらわせるか考えて描く。

準備するもの	生徒 教科書、筆記具、色鉛筆、ポスターカラー 教師 ケント紙ボード(B4判)、ワークシート、各種画材
学習目標	●自分の内面の世界をもとに主題を生み出し、創意工夫して表現することができる。 ●作者の心情や表現の意図を考え、見方や感じ方を広げ、深めることができる。
評価規準	●心に残る風景に、自分の思いを重ねて表現することに関心をもち、主体的に取り組もうとしている。(美術への関心・意欲・態度) ●自分の思い出や体験をもとに発想し、形や色、表現方法の効果などを考えながら構想を練っている。(発想や構想の能力) ●材料等の特性を生かし、自分の意図に応じた表現ができていく。(創造的な技能) ●風景を描いた作品を鑑賞し、作者の心情や表現の意図について、見方や感じ方を深めている。(鑑賞の能力)

# 風景に思いを重ねて

生徒たちの表現のプロセスをご紹介します。

特集  
「私の心の風景」を  
描こう

実際の風景

アイデアスケッチをする

形や色、描き方を工夫して表現する

完成!

親友との  
温かい思い出と、  
今のせつない気持ちを  
描きたい



**K君**



**親友と遊んだ近所の公園**

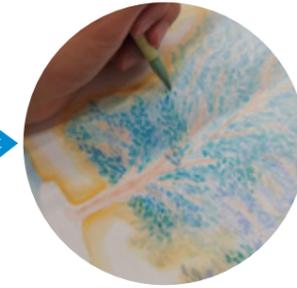
小学生の頃に、親友とここでよく遊んだ。中学校に入ってからは、親友と疎遠になってしまったので、ここを通るたび、少しせつない気持ちになる。



悩みながらアイデアスケッチを重ねる。自分と親友を象徴するように、2本の木を描くことにした。



昔、親友と遊んだときの、温かい気持ちをあらわすため、木の周りをオレンジ色で塗る。



今のせつない気持ちを強調するため、木の葉は青系の色に。立体感を出すため、濃淡をつけながら描く。



自分と親友をあらわす2本の木を包み込むように、画面の両端に木の枝を描いた。

家族に対する、  
ちょっと複雑な気持ちを  
描きたい



**Hさん**



**昔、家族旅行で見た風景**

最近友達と過ごす時間を優先し、家族との仲があまりよくない。でも、昔、家族で楽しく旅行したときの風景の写真を見て、あのときのように、家族と仲よくしたいと思った。



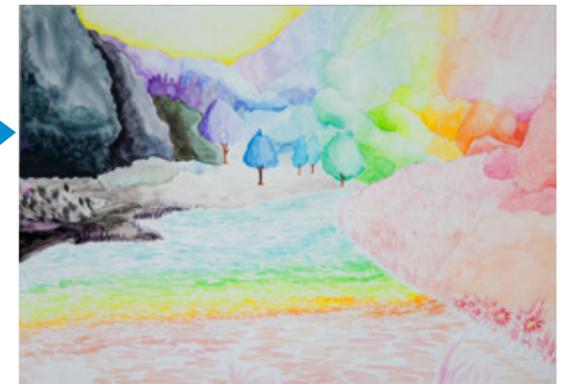
最初は実際の風景に近い色でスケッチをしたが、今の自分の複雑な思いをあらわすため、さまざまな色を使うことに。



少しずつ色を混ぜて、自分の気持ちに合う色を探す。緑色だけで何種類もつくった。



繊細な今の気持ちをあらわすため、薄い色を重ねていく。家族と仲よくしたいという思いは、暖色系の色を使って表現。



明るい気持ちだけでなく、陰りのある気持ちもあらわすため、左側に暗めの色を配した。

野球で感じた、  
うれしさや、  
家に帰れる安堵の気持ちを  
表現したい



**N君**



毎日使う自転車置き場

自転車通学のため、ここから一日が始まり、ここで一日が終わる。この場所を見ると、野球の試合で勝ったときの喜びや、練習の後の「もうすぐ家に帰れる」という安堵の気持ちを思い出す。



アイデアスケッチでは、野球で勝ったときのうれしさや、この場所を感じる安堵感を、オレンジ色の野球ボールの形で表現した。



友達から「このオレンジ色の水玉は何?」と質問が殺到。他の表現方法がよいかも……と思い始める。

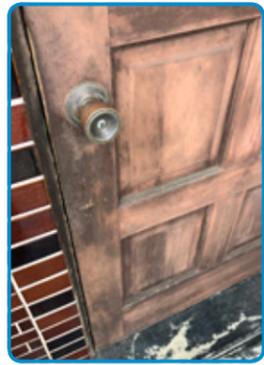


自分の気持ちを、野球ボールの形であらわすのではなく、全体をオレンジ色のグラデーションで描こうと決める。



画面全体を、オレンジ色の濃淡で構成。奥行きを出すため、手前を濃く塗るよう心がけた。

# 私の心の風景



Iさん

## 自宅の玄関

家族とケンカして家を飛び出してしまったときの、迷いの気持ちを描きました。家族の優しさを、扉の隙間からあふれる光として表現し、家族とのさまざまな思い出を玄関のタイルの色で表現しました。



I君

## 山の中で見た滝



家族で山の中をへとへとになりながら歩いていたとき、急に視界が開け、滝が見えました。そのときの感動や、滝のキラキラとした光を、点描であらわしました。



Hさん

## 祖母の茶畑



幼い頃、祖母と茶摘みをした思い出を表現しました。昔はお茶のおいしさがわからなかったけど、祖母と摘んだお茶は、甘くておいしく感じられました。その温かい思い出を、オレンジ色で表現しました。

## 授業を終えて 主題を生み出すために

「心に残る風景」を思い浮かべるとき、人は風景だけではなく、身近な人とのやりとりや、そのときの匂い、音など、五感を使って感じた記憶や感動と一緒に思い浮かんでくるのではないのでしょうか。

本題材は、ただ風景画を描くのではなく、生徒が風景から感じた思いを重ねてあらわすという試みでした。指導にあたって気をつけたのは、次の2点です。

まず、風景を選ぶ際、「きれい」などの理由ではなく、思い入れがあり、記憶や感動がよみがえってくるかどうかで決めること。生活の中で自分との関わりが強いモチーフのほうが主題を発想しやすいからです。

次に、思いをあらわすためにどんな形や色、表現方法を使えばよいかを〔共通事項〕の視点に基づいて考えさせること。ワークシートに言葉で書かせることでそれを認識させ、グループで話し合うことで、主題に最もふさわしい表現方法がぶれないように気をつけました。

思いを作品に込めることで、より深い表現に近づけたのではないかと思います。これからも、生徒が自ら主題を生み出すことのできる授業を実践していきたいです。

## 畠山真理 はたけやま・まり

宮城県生まれ。多摩美術大学大学院修了後、東京都の公立中学校教諭に。2015年より現職。11年に東京都研修センターが実施する「東京教師道場」を修了。12年に東京都教育研究員。



畠山先生の指導者である中村一哉先生に、今回の授業リポートをお読みいただきました。

## 授業リポートを読んで

## 自分と向き合う 美術の授業

畠山先生の授業は、何を描くか、どのように描くかを、生徒自身が見つけていく過程がとていねいに計画された実践です。

作品に描かれたものが風景であっても、そこに表現されているのは生徒一人一人の思いです。本題材のねらいは、風景を見て発見したことや感じたことを描くのではなく、過去の自分の経験を思い返し、そのときの印象や気持ちなどを想像しながら、それを形や色彩、構図などを工夫しながら表現することです。したがって、風景自体は生徒にとって身近で扱いやすい写真を活用し、そこに自分の思いをどのように反映させて表現するかが、本題材の学びの中心となります。

その課題に迫る手立てとして、授業で大事にされているのが「対話的な学び」です。

まず、授業の導入で、写真を選択した理由を説明する話し合いが設定されています。その意図は、風景に込めた思いを語ることで一人一人が表現の意図を確かめ、他者の異なる視点を受け止めながらそれを深めて、自分の主題を明確にしていくことです。さらに、アイデアスケッチの段階でも、相互鑑賞に基づく話し合いが行われます。ここでは付箋を用いて、スケッチに対する具体的な話し

合いや助言が、形や色彩、構成や構図などの造形的な視点に基づいて行われています。つまり、他者の視点を参考にして自分の表現方法を見つめ直し、どのようにあらわすかを考えて、構想を膨らませていく過程といえるでしょう。本授業では、ワークシートやアイデアスケッチを通して自らの思いを具体化していく過程が、明確なねらいに基づく対話による協働的な学びによって深められ、一人一人が納得できる豊かな表現を発見していく展開をつくり出しています。

また、話し合いや制作の過程で、造形的な視点が十分に働くように留意していることも見逃せません。第2時の冒頭に位置づけられた作家の風景画の鑑賞では、色彩や構図などへの気づきが意図されています。いわゆる〔共通事項〕の視点に基づいた鑑賞活動が行われ、それが、生徒自身の表現に生かされることで実感的な理解に結びついていることが感じ取れます。鑑賞の学習経験が、表現の発想や構想を練る場面で活用、応用されることで一層深まり、それがさらなる美術との触れ合いの豊かさにつながる。そこに表現と鑑賞の相互の関連を図ることの意義があるように思います。

そのような美術の学びを、生徒自身が自分と向き合う貴重な体験として自覚できていること。それが畠山先生の授業の魅力です。



## 中村一哉 なかむら・かずや

東京都生まれ。実践女子大学講師。多摩美術大学卒業後、東京都の公立中学校教諭、東京都の教育行政職を経て、府中市立府中第五中学校長を務める。中央教育審議会「芸術ワーキンググループ」委員。学習指導要領(平成29年告示)作成協力者。



# 作家の肖像

## 第 15 回

このコーナーでは、  
毎回一人の作家を取り上げ、  
美術評論家の酒井忠康先生に、  
お話をうかがいます。



# 1920- 野見山 暁治

のみやま・ぎょうじ  
1920年福岡県生まれ。洋画家。東京藝術大学名誉教授。東京美術学校(現 東京藝術大学)卒業。終戦後の52年に渡仏し、58年に「岩上の人」で安井賞受賞。64年に帰国し、68～81年まで東京藝術大学で教鞭を執る。文筆にも優れ、78年に「四百字のデッサン」(河出書房新社)で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。2014年文化勲章受章。

## 自由で懐の深い人

1970年代後半ごろ、「現代日本美術展」という公募展で、野見山さんとともに選考委員を務めたことがあります。審査員は15人ほどでしたが、選ぶ作品にそれぞれの好みや趣向が表れるのが興味深いものでした。野見山さんの場合、どこか気取っていたり、頭で考えたりしたような絵よりも、素人らしい雰囲気漂う、素朴でのびのびした絵を評価していたように思います。

野見山さん自身も、まさにそんな人柄。ユーモアがあって、自由で、実に懐の深い人です。

## 絵から伝わる匂い

野見山さんの作品には具象的なものもありますが、70～80年代に描かれたものはその大半が抽象的な作品といえます。不思議なことに、何をモチーフにしているかがわからなかったとしても、野見山さんの絵であるということはすぐにわかる。鑑賞していると、画家・野見山暁治の匂いが、ふっと伝わってきます。でも、それを捕まえようとすると、たちどころに消えてしまう。そんな魅力がありますね。

こんなこともありました。静岡県で開かれた公募展で、審査員を務めた野見山さんと私、それから画家のなかたにやすし中谷泰さんの三人がタクシーに乗り合わせました。お二人の掛け合いはまるで漫才のようで、中谷さんが「君の絵はまるでじゅうたんのようだね」と茶々を入れると、野見山さんは「ふわふわしているからね」などと笑う。

中谷さんは、野見山さんの、時空

の壁を取っ払ったような悠然たる絵を見て「じゅうたん」と評したわけですが、私は「うまいな」と感心しました。野見山さんの絵を前にして、高尚な絵画論を展開したら、なんだか野見山さんに笑われてしまいそうな気がします。そうではなく、「じゅうたん」と表現したあたりに、野見山さんの絵を見ること、あるいは考えることの本当の妙味があるのかもしれない。

## 意識を超えた“何か”

野見山さんの絵は、心の中で何かを探している人に、「感づくこと」を刺激する絵。ただ、野見山さん自身は、明確な意図やテーマがあって描いているわけではないでしょう。逆説的ですが、ご本人は、何も考えず、ただなんとなく眺めている鑑賞者を好むような気がします。

野見山さんは、身近な自然や風景を五感で感じ取り、浮かんできたイメージを逃さないように描く画家です。目に見えない、手で触れられない、意識や身体感覚を超えた“何か”がわかる人なのでしょう。

例えば、海の色を表すのは青色だけではありません。理屈ではないのです。野見山さんは、そういった感覚に非常にデリケートで、鋭い人。天性のものといってもいいでしょう。そうした自然の本質のようなものを確認するために、野見山さんは長年にわたって描き続けているのではないのでしょうか。(談)

## 酒井 忠康

さかい・ただやす  
世田谷美術館館長、美術評論家。  
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。  
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。  
光村図書中学校「美術」代表著者。



上／「ある日」  
キャンヴァス 油彩 130.3×194cm 1982年  
練馬区立美術館蔵  
福岡県の糸島半島にあるアトリエのバルコニーから、暮れゆく風景を眺めて描いた。



右下／「古びた衣装」  
紙 インク・グワッシュ 56.8×76.2cm 1974年 練馬区立美術館蔵  
古い衣装の塊を精緻に描いたデッサンからイメージを湧かせ、幻想的に仕上げた作品。

左下／「ノルマンディの子供」  
キャンヴァス 油彩 72.8×54cm 1955年 神奈川県立近代美術館蔵  
パリで描かれた作品。酒井先生が以前勤めていた美術館の所蔵品で、印象に残っている作品の一つ。

# 美術部へようこそ! かるいざわ 長野県軽井沢高等学校

地元の特徴を生かした作品づくりに取り組み、地域との交流を大切にしている美術部取材しました。

## ロゴやエプロンをデザイン

赤い生地に白い文字で「カルビ」と記された、おそろいのエプロン。「学年が上がるにつれて、汚れて文字が読めなくなるんです」と、前顧問の斉藤篤史先生(※)は笑う。

軽井沢高等学校美術部、略して「カルビ」。このロゴマークやエプロンは、部員たちがデザインしたもの。こういった部のブランディングが、校外での多岐にわたる活動に役立っているという。

「カルビ」は2013年、部員ゼロのところから始動した。その年に同校に赴任した斉藤先生が声かけをして部員を集め、現在まで、型にはまらない活動を展開してきた。個人制作にとどまらず、チームでの活動も幅広く行う。地域の美術館や幼稚園でワークショップを開催したり、「クラブ新聞」を作ったり—。

## 小所帯でも多彩な活動

なかでも、特徴的なものの一つが、演劇とダンスを融合した身体によるアート表現「パフォーマンス」。これまで、自主展覧会や文化祭などで披露してきた。小道具や音楽、衣装は全て部員が手づくりする。中学生のときにこのパフォーマンスを見たことがあるという部員は、「そのときのインパクトがずっと忘れられず、カルビに入りたいと思うようになりました」と振り返る。

部員数はいつも10名未満。2019年3月時点で、部員数は3名だ。それでも、小所帯ながら常に新しいことに挑戦し、地域に向けて積極的に発信してきた。

2017年には、JR軽井沢駅からの依頼を受け、北陸新幹線(長野—東京間)開業20周年のCM・ポスター制作に参加。最近では、2019年6月に軽井沢町で開かれた環境関係のG20閣僚会合に向けた地元限定ロゴマークを制作した。活動の根底には、「一人で絵を描くだけが美術ではない」という斉藤先生の思いがある。

## 美術で変わる, 成長する

毎年3月には、1年間の集大成として、学校近くの軽井沢千住博美術館で自主展覧会を開催している。準備に半年かけ、会場設営やちらし・ポスターづくりなども部員たちが行う。回を重ねるごとに知名度も向上し、会期中は多くの来場者が訪れる。

濃密な時間を「カルビ」で過ごすことで、生徒たちは新たな自分を発見し、成長していくという。表現活動をさらに深めたいと、美術大学への進学を決めた部員も少なくない。「内面を解放し、外に開くことで、つくることの喜びを知ってもらいたい」と斉藤先生。この春、美術大学へ進む3年生は「カルビは人生を変えてくれた場所」と笑顔で語った。

※2019年4月から  
長野県上田染谷丘高等学校に勤務。



上/赤いエプロンを身につけた3名の部員。学年を超えて仲がよく、いつも笑い声が絶えない。  
左/2017年に軽井沢千住博美術館で披露されたパフォーマンス。  
右/2019年3・4月に軽井沢千住博美術館で開かれた自主展覧会『「ほぼカルビ」展』。

# 教室を飛びだして

## アーカスプロジェクト(茨城県守谷市)

国籍や世代を超え、アーティストと地域住民がつながる、茨城県守谷市の「アーカスプロジェクト」をご紹介します。



守谷市の旧小学校校舎を拠点にした「アーカスプロジェクト」は、1994年に始まった。県や守谷市などで行う実行委員会が運営するプロジェクトの基盤は、国際的に活躍するアーティストを一定期間招き、創作を支援する「アーティスト・イン・レジデンス」だ。

毎年夏から年末にかけての4か月間程度、現代芸術分野の若手アーティスト数名が滞在し、創作に励んでいる。これまで、33か国から100組以上が訪れた。

期間中には毎年、アーティストの制作現場を公開する「オープスタジオ」を開催。小中学生向けのスタジオツアーもあり、参加者たちは、普段見ることのできない作品制作の裏側を、アーティスト本人との対話

をとおして知ることができる。

毎回、子どもたちはアーティストの話に興味津々といった様子。「どうしてこれが作品なの」「作品とは思えない」—。質問のコーナーでは、ときにドキドキするような言葉をアーティストにぶつけることもある。しかし、その純粋な感想が、アーティストにとって新しい発見につながることもあり、お互いにとってよい刺激になっているという。毎年参加する「常連」もあり、この体験をきっかけに、美術大学へ進学した住民もいる。

「世界のアーティストとの交流をとおして、さまざまな表現方法があることを知ってもらいたい」とプロジェクトマネージャーの石井瑞穂(いしかみみほ)さんは語る。アートとの出会いが、地域の潜在力を高めていく。



海外アーティストのオープスタジオの様子。中学生たちは熱心に耳を傾けている。

# 放課後

第15回

# ART



## 56億7千万年後の瞳

大好きなんだけど、その存在が遠く感じられ、なかなか一方通行の思いから抜け出せない。片思いの時期が長い仏像との距離は、こちらから縮めていくしかありません。私は4回、その仏像に「会う」ことで、目が合い、心が通じ合い、友達になれると信じています。

子供の頃に「温泉に来たら帰るまでに4回はお風呂に入るんだよ」と、父に言われたことがありました。1泊の温泉旅行で4回もお風呂に入るのはなかなか大変なことで、当時は温泉よりも遊びたい気持ちでいっぱいでした。

それから数十年、今でも父の言葉どおり、温泉宿に泊まる時は、必ず4回はお風呂に入っている私。この「4回」が仏像との距離感を縮める数字でもあったとは！ 父が何気な

く口にした言葉は後に、私の仏像ライフにも大きな影響を与えることになりました。

そういえば最近、疎遠に感じている仏像がいらしたなあ……。その仏像は、広隆寺(京都市)の弥勒菩薩さま。お釈迦さまが亡くなってから56億7千万年後にこの世に現れ、民衆を救いに来てくださるとされている仏さまです。

広隆寺にいらっしゃる弥勒菩薩さまは飛鳥時代に制作され、国宝第一号に認定されています。まだ悟りを開いていない、修行中の身である「菩薩」は通常、装飾品を身につけているのですが、広隆寺の弥勒菩薩さまは悟りを開き、如来となる未来のお姿を描いているので、とってもシンプル。

私は久しぶりに、安置されている

霊宝殿に足を踏み入れ、弥勒菩薩さまの前に立ちました。

お会いするのは三度目。まだ友達までの関係には至っていません。「ご無沙汰しています」と挨拶すると、弥勒菩薩さまの姿が暗闇からぼんやり浮かび上がってきました。背の高さは約124cm。華奢な体と、指を頬に当てるオッカーサインが印象的で、この日も、長い間ご無沙汰してしまった私に「全然オッカー」と、微笑みながら器の大きさを見せてくださいました。56億7千万年という時空を超え、この地球に到着される時も、きっと同じオッカーサインを見せてくださることでしょう。

そんな弥勒菩薩さまと友達になれるまであと1回。今回の訪問で、私たちの距離は5億年くらい縮まったような気がしました。

## 第 15 回 彌勒菩薩半跏思惟像

アカマツ 高さ123.3cm 7世紀前半  
広隆寺蔵(京都市)  
画像提供:飛鳥園  
※「美術2・3」P.92に掲載

横浜市生まれ。モデル・タレント。17歳でモデルデビュー。上智大学在学中もモデル活動を続け、その後もテレビ・ラジオ出演、エッセイ執筆など幅広く活躍。趣味はお菓子づくりや茶道、仏像鑑賞。2017年9月に国宝応援大使に就任。著書に『ちいさいぶつぞう おおきいぶつぞう』(冬舎)、『はな、茶の湯に会う』(淡交社)など多数。

はな